

# 人権作文

## 『人権劇』と『出会い』



小松高校3年  
今川久美子さん

12月5日に開催された「小松町差別をなくする市民のつどい」において発表された、今川久美子さんの人権作文をご紹介します。

う欄を見たときは何も考えず、すぐに電話をしていました。今振り返ると、これが最初の『出会い』でした。『出会い』はこれだけではなく、初めての顔合わせにもありました。中学時代の担任の先生がリーダーで、その他にもお世話になった先生の顔もありました。

その日から人権劇への活動が始まりました。みんな真剣で、私も一生懸命取り組みました。学校から帰って、練習のために市民会館や小学校へ向かうのが負担となるときも多くなりました。練習をしたある日の帰りに、私のおばあちゃん役の先生が「方向一緒じゃけん一緒に帰ろう」と言っていて車に乗せてもらったときの会話です。

「先生、みんな劇が好きだから一生懸命やってるんですよ」  
「本当にそう思う？みんな仕事が終わってから来とるんよ。劇が好きなので、やっとする人はおらんと思うよ。もっとやりよる意味を考えないかんのんじゃない」  
「すみません。みんな仕事でしんどいのにやりよるのは、この劇の意味を理解しているからなんですよね」  
「うん」

私は何にでも興味を持つ性格で、特にミュージカルや演劇が大のお気に入りです。そんなことから、「市民による人権劇の参加者募集」とい

すぐく遠く感じました。みんなとの距離も大きかったということも分かりました。

この「おばあちゃん」の一言で私の一生懸命の意味、考え方、取り組み方が大きく変わりました。私の役は、元気で何事にも前向きな少女『まゆみ』。自分そのものだと思っていたのが誤りで、みんなの台詞から、家庭内暴力の子どもや両親の気持ち、お年寄り夫婦の苦しみ、辛さなど、いろいろなことが見えてきました。みんな悩みを持って一生懸命生活していることも。

「劇が好きだから」という気持ちだけでは、相手の台詞はただの言葉でしかありません。次は私の番だ、というタイミングだけの意味で会話し、一生懸命やっていたと思っていた自分がひどく子どもに思えました。もう一度、物語を読んでみると



▲人権劇で熱演する今川さん【写真右】

心にジーンとくるものがありました。今まで分からなかった（分かっていたと思っていた）『まゆみ』の気持ちがとても素晴らしく思えました。これが一番大きな『出会い』でした。練習は厳しく、みんな役になりきったりリアルな演技で、不思議なムードが漂っていました。「おばあちゃん」の言葉で、本当に涙が出たこともありました。

本番の公演では、本当の場面を見ているような迫力がありました。客席のお年寄りが涙をふいているのが見えたとき、みんな同じ気持ちなんだということが感じとれました。

劇の中で、おばあちゃんと私が進めた「地域コミュニティ」のキーワードは仲間です。地域のみんなが助け合って、勇気づけ、励まし合いながら生活していくことは、本当に今の社会に一番必要なことだと思います。これが、私が人権劇から得た素直な気持ちです。

早いもので、あれから一年がたちました。ある日、母から「そこにあるハガキを見て」と言われ、手に取ってみると、あの人権劇を小松で公演する計画があるのです。

私は、もう一度参加することに決めました。あのとき、自分なりに納得していたことを、今振り返ってみるとまだまだ奥の深い部分が見えてきたからです。

それは、私がああときよりも少し成長したからだと思います。